

はじめに

雑誌名	甲南大学総合研究所叢書
巻	146
ページ	1-2
発行年	2022-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1260/00004361/

はじめに

本叢書は、2020年から2021年の甲南大学総合研究所公募による共同研究「大学教育におけるアクティブ・ラーニングの実践と考察」の研究成果をまとめたものである。

「アクティブ・ラーニング」がアメリカの大学で1960年代から取り入れられるようになり、日本の大学でも従来の講義形式の授業ではない能動的な学修のスタイルの教育手法として活用されるようになった。2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」において、本格的な導入が提起され、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称」とし、アクティブ・ラーニングにかかる用語の定義が示された。

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業形態は大学教育の中でも進み、さらに学生の問題解決能力を在学中に習得させ、主体的な学びをどのように大学教育の中で提供すべきなのかを論じなければならない状況になっている。

今回は、甲南大学で教鞭をとる4名の所属や専門の異なる教員のそれぞれの立場から本学のアクティブ・ラーニングの取り組みや課題などを検討すべく共同研究を行ってきた。

研究公募当初は、それぞれの授業を大規模授業、中規模授業、小規模授業に分類し、その中でどのようなアクティブ・ラーニングが実践できているか、また、効果や課題についてもデータを取りそれぞれの規模に対する効果的なアクティブ・ラーニングとは何かを考察していくことを研究の課題としていた。しかし、COVID-19の流行により大学での授業形態は急激な変化を強いられることとなり、これまでの授業をベースにしたデータの収集や授業内でのアクティブ・ラーニングの実施例を研究対象とすることが困難となった。

そのため、それぞれの研究者の専門性を活かしたCOVID-19下でのアクティブ・ラーニングの現状や取り組み、課題などを分析することとした。

山本が大学でインターネットを利用したいわゆるオンラインの遠隔授業（同時双方向型、オンデマンド型）が行われている現状に対し、文科省による「遠隔授業」が「授業」として成立するための要件を確認し、要件を満たした遠隔

授業でどのようなアクティブ・ラーニングが実施可能であるか、また、各種の授業方法の組み合わせによるカリキュラム全体でのアクティブ・ラーニングの実現の方向性を検討する。

小西は所属する共通教育センターが提供する学部横断型の初年次教育の授業「共通基礎演習」において、アクティブ・ラーニングがどのように科目全体のデザインに考慮され実践されているかを考察する。通産省及び文部科学省が求める「社会人基礎力」をもった社会に必要な人材とはどういったものかについても検討する。プロジェクト型の授業ではアクティブ・ラーニングを活性化し、教育涵養にどのような配慮がされているかについても考察する。

千葉が同じく共通教育センターが提供する本学のキャリア教育におけるアクティブ・ラーニングの導入事例を通じて、教育効果と課題、今後に向けた示唆について検討する。初年次生対象のキャリア教育科目「ベーシック・キャリアデザイン」を一事例として取り上げ、アクティブ・ラーニング型の授業のデザインについて、コロナ禍における授業構成の変更点や工夫などを考察する。受講経験者へのインタビュー調査の結果の分析からコミュニケーション能力をはじめキャリア教育の基礎的・汎用的能力に関連するスキルの向上などの効果がどのように示唆され、今後に向けた課題がどのようなものであるかを検証する。

中村が本学の国際言語文化センターが提供する外国語科目（フランス語）と言語文化科目（講義科目）においてアクティブ・ラーニングがどのように実践されているかを実際の授業例を取上げ、その狙いと目的について解説し、言語文化科目で行った「授業実態アンケート」及び受講生へのインタビューから実践の妥当性と教育効果について検証する。また、これらを検討し改善に向けた取り組みについても言及する。授業内での事前学習、アクティブ・ラーニングの導入、授業後の課題への取り組みを通じて一連の学習体験が社会人として必要になる実践的能力の育成にどのような貢献をしているかも考察する。

今回の研究の成果が、コロナ禍でより自律的なアクティブ・ラーニングが必要とされる現状への授業運営に対する一助となるように、研究会で意見交換をし、それぞれの実践例での情報交換やデータの検証を重ねた結果をまとめた。大学においてどのようなアクティブ・ラーニングが実践されるべきかへの示唆となればと願っている。